新 刊

□台湾植物誌第二版編輯委員会：**台湾植物誌第二版 第六巻** i-viii＋343 pp. 2003. 国立台湾大学植物学系出版. ISBN: 957-01-3492-5.

台湾植物誌第二版は1993年に出版が始まり，2003年に完成した．最初の第3巻に続いて，1994年第1巻，1996年第2巻，1998年第4巻，2000年第5巻の出版を経て第6巻が2003年に出版され，同時に別冊子で正誤表が発行された．台湾植物誌第二版は1975年から1979年にわたって刊行された同植物誌（初版）の改訂版であると同時に，台湾の研究者による現地調査のデータや標本を基礎として作られ，初版が主に当時の標本館に所蔵されていた標本に基づいて作られたのと異なることに特色がある．日本のフロラに関連した重要な出版物である．台湾植物誌第二版は最初に出版された第3巻についての山崎敬先生の紹介（本誌**69**: 241–243, 1994）以外には紹介されていないが，主に第6巻についてここに取り上げておきたい．

この第6巻には台湾植物の概要，台湾産維管束植物のチェックリスト，学名索引および台湾名索引が含まれている．台湾の維管束植物全体の概要は謝 長富 Chang-Fu Hsieh の執筆である．台湾の維管束植物構成（自生＋帰化）はシダ629＋1種，裸子28＋0種，被子3420＋261種，全体では235科，1419属4077＋262種とされる．大きな科と種数（自生＋帰化）はラン（336＋0），イネ（248＋42），キク（195＋46），マメ（180＋38），カヤツリグサ（180＋1）である．台湾の固有種はシダ72，裸子18，被子977種で，固有種数の多い科はラン，キク，バラ，イネ，マメ科の順である．地理的分布を見ると，台湾と日本に共通し，中国に分布しないのは318種，その中で210が台湾と日本に固有，一方台湾と中国に共通し，日本に分布しないのは991種，その中で350が台湾と中国に固有であるという．台湾産維管束植物のチェックリストはD. E. Boufford 他の編集委員によってまとめられ，15–139ページを占める．本植物誌に採用された学名と1993年からの10年間で改正された学名とが対照され，また本植物誌出版中に刊行された中国語の「台湾維管束植物簡誌」で用いられた本書と異なる学名が調べられ，両植物誌の学名が対比されている．さらに全固有種について5段階の危急度が台湾本土を図案化したマークで表示されている．このチェックリストは台湾産維管束植物の全容を把握でき，大変に役に立つものと思われる．

台湾植物誌第二版は初版に比べると異名，記載など簡略化され，図が多く，巻末には多数のカラー写真で生態が示されている．分類学者以外の研究者にも明らかに使いやすくなったと思う．台湾植物誌第二版の完成を祝い，編輯委員会を主導した台湾大学黄 増泉教授の多大な貢献を高く評価したい．（大橋広好）

□中国科学院中国植物誌編輯委員会：**中国植物誌 中名和拉丁名総索引** i-xiii＋1155 pp. 2006. 198.00元. 科学出版社，北京. ISBN: 7-03-016148-3.

中国植物誌80巻126冊の刊行は1959年に始まり2004年まで45年間で終了した．真に素晴らしく，この完成に心から敬意を表したい．これまでの刊行によってすでに日本の分類学研究にも大きな進展をもたらしており，将来も日本植物の研究に欠かせない大出版物である．この植物誌全体については2004年に出版された第1巻に詳しい紹介と総説が含まれている．本年この植物誌巻外として全体の学名と中国名の総索引が出版された．学名の編集者は馬 其雲 Ma Chiyuan，賀 士元 He Shiyun，夏 振岱 Shia Zhendai である．表紙裏にある内容簡介では第1巻を含まないとあるが，これは嬉しい間違いで，第1巻に含まれている Tetracentraceae も学名索引にきちんと採取されている．1–440ページが中国名索引，441–1155ページが学名索引であり，学名は約120,000個が含まれるという．Ma and Clemants (Taxon **55**: 451–460, 2006) によると中国植物誌には302科3,444属31,228種5.553種内分類群が含まれているというから，このうち約8,000個は異名であろう．採用された学名はローマン体，異名はイタリック体で区別されており，科より下のランクの学名および種以下のランクの分類群形容語には著者名が付けられている．（大橋広好）